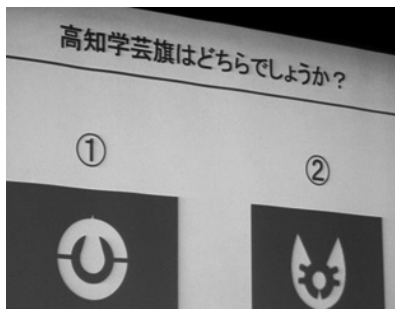


クイズとビンゴで、真剣になって、



学芸讃歌を熱唱。



次の総会の準備は30期にお願いしました。

2次会も、大盛り上がり。



29期でお手伝いいただいたみなさん、ありがとうございました

音楽が導く

映像への舞台

ピアニスト／プロデューサー

さいが
雑賀(濱口)典子氏(24期)

ピアニストとしてだけでなく、映画やテレビ番組のプロデューサーとしても活躍中の雑賀さん。仕事への関わり方から「高知に似いちゃう」という造詣の深いスペインの魅力まで幅広くお話を伺いました。



◆ピアニストもプロデューサーも常に全力投球！

現在は、ピアニストとプロデューサーという二足のわらじをはいている状態です。ピアニストとして、

〈雑賀(濱口)典子氏 PROFILE〉

1964年12月28日生(50歳)。野市町出身

【学歴】

初月(みかづき)小学校→高知学芸中・高校→武蔵野音楽大学・大学院(ピアノ科)。1999年国立音楽大学音楽研究所通奏低音コース(チェンバロ)修了。

【経歴】

1989年第13回下八川賞(シモヤカワ)賞(高知県)を受賞。2000年日伊協会の奨学生としてイタリア研修。2005年～2014年まで毎年スペイン文化省などの奨学金を得て渡西を重ねる。2005年'Musica Compostela' アンドレス・セゴビア賞受賞。2010年作曲家サンディアゴ・バエス氏より「前奏曲集」を献呈され世界初演。2008年コルドバ葡萄収穫祭週間に招待されピアノリサイタルを行い、アンダルシアの各メディアで報道された。2013～14年「日西交流400周年記念演奏会」を日本・スペイン各地で行う。

【現在】

昭和音楽大学・日本オペラ振興会オペラ歌手育成部・財団法人ヤマハ音楽振興会講師。㈱サーフ・エンターテインメント代表取締役として、2012年映画「リトル・マエストロ」(上海国際映画祭招待作品)、2015年映画「カノン」を制作。2015年日本スペインピアノ音楽学会設立(副会長&事務局長)。



映画「リトル・マエストロ」で上海国際映画祭へ

昭和音楽大学・日本オペラ振興会オペラ歌手育成部・財団法人ヤマハ音楽振興会講師を務め、足利オペラリリカ及び二期会スペイン音楽研究会のピアニストです。その傍ら、(株)サーフ・エンターテインメント代表取締役として、映画やテレビ番組の制作にも携わっています。ピアノ、スペイン、旅行と好きなことを続けてきたら、さまざまな出会いによっていつの間にかたぐり寄せられた、というべきでしょうか(笑)。特にプロデューサー業は、現場でのアクシデントが沢山ありますが、どんな危機にもひるまず乗り越えてこられたのは、学芸時代に経験したことが大きいかもしれません。



第5回ピアノ発表会 1981.3.15

◆友達の少ない小学校時代。ピアニストになると決めていた父の仕事の関係で、小学校時代は転校ばかり。できた友人も1、2年で別れてしまったのですが、転校する先々で先生が変わってもピアノだけは続けていました。ピアノの練習を苦痛と思ったことは一度もなく、私にとってはご飯を食べたり、勉強したりすることと同じで、あくまで生活の一部。小学校時代には、すでにピアニストになると心に決めていました。学芸中に入る頃、父が野市に家を買いました。ところが、自宅から学芸に通うのに、始業時間間に合う時間帯にバスがない。「じゃあ、送り迎えしちゃうよ」と、父が出勤時間を早めてくれて、中高6年間も父の車で通学。高知市内の父の会社で自転車に乗り換えて、そこから学芸まで往復しました。



高校のクラスマッチで若さ爆発(本人はどこ?右下)

だから、放課後に友達とお茶することもなく、父の仕事が終わるころに、父の会社の守衛室まで戻る毎日。ふだんは一人でピアノを弾いているような、無口で笑顔の濱口さん”でしたが、クラスマッチの時はクラスが本当にひとつになって、燃えました!

◆困っている人を見ると助ける。

高2で、社会人の伴奏を即興で

そんな一見おとなしそう(笑)私でしたが、内に秘めていたものがほとばしり出たのが、高校時代のこと。高校2年生のときに、下八川賞音楽コンクールに出場し、高校生に与えられる奨励賞を受賞したので。この時に起きたハプニングは、今も忘れられません。なんと私、見ず知らずの社会人

のソプラノ歌手の伴奏を初見(知らない曲の楽譜を見て、すぐに演奏すること)でやったんです!

しかも、プッチーニのオペラ「蝶々夫人」が死ぬ時の激しいアリアです。「このオペラアリアはテンポが動くから、とにかく私が一声歌ったら、畳み掛けるように和音を弾いて!」と歌手の方から指示され、無我夢中で弾きました。もともとは、「大阪から来るはずのピアノ伴奏者が来られなくなった。だれか伴奏してくれない?」と、困った人を助けたいという気持ちで、思わず手を挙げたこと。高校では声楽の友達とイタリア古典歌曲の初見演奏大会を自習時間に行っていたとはいえ、無謀でしたね。現在は実際にオペラの伴奏者として働いています。プッチーニの作品は本当に難しく、今思うとぞっとします(笑)。でも、意外と慌てずできたのは、危機に強いのもかもしれません。

◆大学3年で「鉄の心臓」から

「ノミの心臓」へ暗転?

中・高校時代、毎日父と家を出て帰宅する「箱入り娘」だったゆえに、東京での音大暮らしでは、寮の友達から呆れられました。なにしろカップ焼きそばのお湯の入れ方や洗濯機の動かし方を知らなかったのですから(笑)。音大生と



大学生の頃のピアノ発表会

いえば、当時麻雀が流行っていたのですが、ゲームに参加しない人は隣の部屋で友人の弾き方のマネをしたり、失敗した時の間違い方を強調して笑いをとったり、常にピアノがそばにある生活でした。週末は他大学の音楽サークルのバンド練習やコンパなども楽しみました。

それまで順当に歩んでいた音大生活でしたが、大学3年の時の試験では大失敗。前年の試験の成績がとても良くて、翌年の公開試験では、同級生も含めて驚くほど人が集まり、そのプレッシャーでボロボロ。高校生で社会人の伴奏を初見演奏した「鉄の心臓」が、もろくも「ノミの心臓」へと崩れ落ちた瞬間でした。でも、さっぱりした気性の先生から「はい、ご愁傷さまでした(笑)」と肩をたたかれ、次からがんばろう、と気持ち

す。私の周りにはさっぱり気質の人が多いかな。

◆英語を学び続け、スペイン語は独学で習得!

大学院2年生の時に、再び下八川賞を受賞したことがきっかけで、その後、昭和音楽大学の講師となりました。20〜30代はバブル全盛期で、沖縄、台湾、韓国クルーズなど、日本丸での演奏も2回ほど! 演奏活動も続けていきましたが、でも、次第に他のピアノリストと同じレパートリーを弾くのが嫌になってきたのです。自分に合う音楽って何だろうと探していた頃、スペイン留学を終えたばかりの歌手と知り合いました。その彼女が誘ってくれた夏期講習がき



ラテン気質のスペインの仲間たち